所の御えむにおかれたりしが、雨などの降日はことになく、げにぞなもさやかにきこゆ、すがたはひえどりのやうにて、いますこし大きなり、辨內侍、

とにかくにかしこき君が御代なれば三のたからの鳥もなく也

〔一話一言二十四〕忍岡南塾乘抄

二十四日一〇寛文十年四月快晴、春常談曰、今度日光法會中、深山有鳥囀慈悲、梶定良聞之、小田原拾遺以之問春常、常曰、傳稱此山有佛法僧鳥、乃是三寶鳥也、慈悲心亦是此鳥乎、引空海詩敦光記呈之、大使喜曰、今度晴日多而雨少、且聞此稀鳥云云、山人稱曰、癸卯歲大猷公〇德川家光十三回忌法會、聞此鳥發聲、其後九年不聞、而今月朔日以來數鳴、可謂奇也、山人之言不足信焉、定良平生所言皆實、舉世所知、此人言自聞之、故知其不虛也、朔日者大使發江戶日也、故大使甚喜云云、定良又談曰、堀田備中守登山拜大猷公靈堂時、此鳥囀慈悲心兩聲、定良亦切聞之云云、大使亦聞之云云、由是登山人傳寫常所記、頃間已達江戶云云、余聞之、謂想深山中可有奇鳥、不審慈悲爲三寶否、常雖不自聞此鳥、以敦光記謹此山有奇鳥、其一座之谷不爲不當、然大使推之以爲實證、非必爲常附會成之、

〔閑田耕筆三〕慈悲心鳥といふものは、下野の黑髮山にあり、日光山なり、此鳥の形狀鶯のごとく、羽は鼠色にして尾長く、足と背は黑し、聲勝れて高く、夏の氣候に入れば、晝夜ともに啼と、百井塘雨筆記に出るせり、此人は足跡天下に周き人なり、さるに其宮に仕まつる鵜川氏、はからず比えの山にても聞つけしと語られしかば、栢原瓦全なる人、彼ますほの薄をとひにまうでし登蓮法師が昔にならひて、やがてふりはへて比えにのぼりしに、比は水無月計、唯老の鶯駒鳥などの聲のみなりしかば、口をしながら諸堂ども拜みめぐり、暑さに汗あへて、こうじたれば、よしや今はとて下りしに、水呑みと云人舍のほどにて、ほのかに聞つけたり、あはやと心を去づめ、耳を澄すに、十聲計清らに鳴つゞけたるうれしさ、いはんかたなかりしといへり、〇中略比えに詣る人は、心にかくべきことぞ、又佛法僧といふ鳥も、同じく鳴聲につきて名付たる類也、高野山に名高き